

太宰府の文化財

vol. 488

国分地区で見つかった硯 川添遺跡第4次調査 国分三丁目地内 奈良・平安時代

令和4年度に国分地区の二画で発掘調査を行いました。ここから奈良・平安時代(8~9世紀)の建物跡や、古代の文房具の一つである硯が見つかりました。

硯と聞くと学校で使用する石製で長方形の硯を思い浮かべますが、発掘調査で見つかったものは須恵器製で、形も現在のものと



写真1 円面硯



写真2 亀形硯の脚部

は異なります。硯は古代においては、おもに官人や僧侶など限られた人々が使用するものでした。

写真1は「円面硯」と言い、円盤とそれを支える脚がつきます。高さ5.7cm、復元径約18cm。脚部には装飾として円形の透かしが均等に配置されています。上面の平らな部分が陸と呼ばれる硯面で、

淵には海と呼ばれる溝が巡っており、ここに墨が溜まります。写真2は動物の脚を象ったもので(形象硯)、硯面を支えた脚の一つです。欠損部近くには動物の皮膚を表現する線刻があり短脚で平たい爪先になっています。似たものに奈良県の平城京で出土した

亀形硯があり、見つかった脚も亀を模したものと考えられます。古代の硯は、役所跡や寺院跡などの公的施設で見つかります。調査地周辺をみると筑前国分寺・尼寺跡が近くにあり、古代寺院には、寺の運営や僧の生活を支えるために必要な倉や鍛冶場などの施設・建物があることが知られています。これまでの国分地区での調査でも奈良時代の掘立柱建物や、鍛冶に関連する鋳型や炉壁など、寺院との関係が窺われる遺跡が見つっています。今回の調

査でも東西10m以上、南北9mの大型建物が1棟、東西5.5m~6m、南北4mの建物2棟が見つかり、寺院に関連し、文字を扱う関連施設であった可能性があります。

当時、硯の多くは元々食器として使われる須恵器の坏蓋(くわい)などを利用しており、専用に作られた硯は位の高い人々が使用していました。また、職掌や権威を示すものでもあり、文字を扱う人々にとって円面硯や形象硯は、あこがれの品だったことでしょう。

文化財課 中村 茂央(なかむら しげお)

写真2は奈良文化財研究所2007「平城京出土陶硯Ⅱ平城京・寺院」奈良文化財研究所史料第80集より転載

筑紫地区文化財写真展

「色のパレット」筑紫の歴史を彩る文化財」を開催

文化財課調査係

(☎内線470)

日時 1月6日(火)~18日(日)
会場 いきいき情報センター
2階 市民ギャラリー
(ページID:44615)

太宰府市公式SNSのフォローをお願いします!

